

旧約聖書における「平和」思想

樋口 進

キーワード：平和、構造的暴力、貧困、格差、シャローム、預言者、正義、公正、イザヤ

はじめに

ノルウェーの政治学者ヨハン・ガルトゥングは、「平和」を単に戦争のない「消極的平和」を越えて貧困や抑圧、差別といった構造的暴力の止揚を目指す「積極的平和」を主張したが¹、今の日本はこれとはほど遠い現状であると思われ、「平和憲法」はあるものの、とても「平和な」社会とは言い難い。その一つに、「格差社会」の拡大という現実がある。橋本俊詔は『格差社会』において、1980年代以降日本の所得分配が不平等化しており、最近ではその傾向が拡大しているということを指摘している²。彼は、先進国の所得分配の現状を①平等性の高い国、②中程度の国、③不平等性の高い国の3つに分類すると、日本は③に属する、と言う。ちなみにこの③には、ポルトガル、イタリア、ニュージーランド、アメリカ、イギリスも属している。厚生労働省の国民生活基礎調査によると、今や日本の相対的貧困率は16%を越えており、従って6人に1人が貧困ということになり、OECD加盟30カ国中4番目に高いとされている。母子あるいは父子家庭では、それは5割を越えていると言う。今や日本社会は、かつての「うりざね型」から中流がやせ細り貧困層が膨らむ「ひょうたん型」に変わりつつあると言われる。それに伴い、教育格差も拡大し、貧困層は高度な教育を受けられず、貧困のスパイラルに陥っているという指摘もある。また、都市と地方との格差も拡大している。そのような中で、弱者からわずかな金を吸い上げる貧困ビジネスも横行している。さらに、橋本健二は「現代の日本社会は、もはや『格差社会』などという生ぬるい言葉で形容すべきものではない。それは明らかに、『階級社会』なのである」とまで言う³。「平和憲法」をもち、一見平和に見える現代の日本社会だが、このような格差社会（階級社会）の状況は真の平和と言えるであろうか。

1. ヘブライ語のシャローム

旧約聖書の原語であるヘブライ語で「平和」を意味する語は、シャロームである。このシャロームは元来、何か欠如したり、損なわれたりしていない充足状態を指し、そこからさらに人間の生のあらゆる領域にわたって真に望ましい状態を意味する語である⁴。従って、シャロームは、人間における健康、繁栄、安全などを表す広い意味をもっている⁵。創世記29章6節に「ヤ

コブは更に尋ねた。『元気でしょうか。』『元気です。もうすぐ、娘のラケルも羊の群れを連れてやって来ます』と彼らは答えた」とあるが⁶、ここで「元気」と訳されている語は原語ではシャロームである。また、創世記43章27節に「ヨセフは一同の安否を尋ねた後、言った。前に話していた、年をとった父上は元気か。まだ生きておられるか」とあるが、ここで「安否」と訳されている語も「元気」と訳されている語もシャロームである。また、サムエル記下18章29節に「王が、『若者アブサロムは無事か』と尋ねると、アヒマアツは答えた。ヨアブが、王様の僕とこの僕とを遣わそうとしたとき、大騒ぎが起こっているのを見ましたが、何も知りません」とあるが、ここで「無事」と訳されている語もシャロームである。また、詩編38編4節に「わたしの肉にはまともなところもありません。あなたが激しく憤られたからです。骨にも安らぎがありません。わたしが過ちを犯したからです」とあるが、ここで「安らぎ」と訳されている語もシャロームである。また、詩編37編11節に「しかし柔和な者は国を継ぎ、豊かな繁栄をたのしむことができる」とあるが、ここで「繁栄」と訳されている語もシャロームである。また、創世記15章15節に「あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く」とあるが、ここで「安らかに」と訳されている語もシャロームである。また、詩編55編21節に「彼らは自分の仲間に手を下し、契約を汚す」とあるが、ここで「仲間」と訳されている語もシャロームである。また、ヨシュア記9章15節に「ヨシュアは彼らと和平を結び、彼らの命を保障する契約を結んだ」とあるが、ここで「和平」と訳されている語もシャロームである。

以上のように、ヘブライ語のシャロームは、人間の生のあらゆる領域にわたって真に望ましい状態を意味する語であることが分かる。それは単に精神的な平安状態のみでなく、歴史的・社会的な具体性を伴った福祉状態を包括する概念でもある。イザヤ書45章7節に「光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである」とあるように、平和は神の業であり、神の賜物に他ならない。それは人間が神の意志に基づき、正義を行うことによって、神との契約関係を正しく保持するところによりのみ実現される。エゼキエル書34章25節には、「わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。悪い獣をこの土地から断ち、彼らが荒れ野においても安んじて住み、森の中でも眠れるようにする」とあり、神がイスラエルの民と「平和の契約」を結ぶと、人々は安心して暮らすことができると言われている。

イザヤ書32章17節に「正義が造り出すものは平和であり、正義が生み出すものは、とこしえに安らかな信頼である」と言われるように、平和は正義や公正と切り離すことはできない。しかしながら、古代イスラエルの社会において、しばしば支配者階級が正義や公正を踏みにじり、貧しい者を抑圧し、社会的格差を拡大していった。このような状況に対して、預言者たちが真の平和の観点から激しく非難したのである。

2. 預言者の格差社会批判

旧約聖書のヘブライ語において、「平和」を意味するシャロームは、単に戦争のない状態を言

うのではなく、神と人間との「正しい関係」に基づいて形成されるものである。旧約聖書の預言者は、その神と人間との正しい関係を「公正（ヘブライ語でミシュパート）」と「正義（ヘブライ語でツェダーカー）」で言い表した。従って、「平和」と「公正」「正義」は密接に関連する。このことは、ガルトゥングの「積極的平和」に通じるものがある。

旧約聖書の預言者たちは、当時の支配者階級が弱者から搾取し、格差を拡大していた状況を痛烈に非難したのである。特に、紀元前8世紀に活躍した預言者アモスや預言者イザヤ、預言者ミカはそうであった。

① アモスの格差社会批判

アモスが活動した紀元前8世紀の中頃のイスラエル王国は、ヤロブアムⅡ世が王として支配した時代であり（前787-747年）、この頃イスラエルは平和と繁栄を享受していた。ヤロブアムⅡ世は、領土的にもかつてのダビデ・ソロモン時代を彷彿とさせる広さを回復していたようである。列王記下14章15節には「しかし、イスラエルの神、主が、ガト・ヘフェル出身のその僕、預言者、アミタイの子ヨナを通して告げられた言葉のとおり、彼はレボ・ハマトからアラバの海までイスラエルの領域を回復した」とある⁷。この「彼」は、ヤロブアムⅡ世のことである。「レボ・ハマト」は、旧約時代に最大の繁栄を誇ったソロモン王（前965年頃）の領土の北端とされた地名であるが⁸、正確な場所は分からない。おそらく、ダマスコから約70キロ北の、レバノン山とアンチレバノン山の狭間の北端に位置し、ユーフラテス河地域への入り口になる町のことであろう。「アラバの海」は死海のことである。「レボ・ハマトからアラバの海まで」で、イスラエルの最大の領土を表した⁹。

しかしこのような繁栄は、支配者階級によって農民階級が搾取されたことによって成り立っていたのである。この時代、支配者階級はイスラエル古来の土地法を無視して、王国成立（紀元前約1000年）以前の時代から大切にしてきた先祖からの相続地を農民階級から巧みに取り上げ、大土地所有を拡大していたのである。土地を取り上げられ、貧しくなった農民が借金を返せない場合、支配者階級は彼らを簡単に債務奴隷としてこき使ったようである。このような状況にあって、アモスは神から遣わされた預言者として、支配者階級を痛烈に非難した¹⁰。

アモスは、とりわけ「弱い者」や「貧しい者」を虐げる富める支配者階級を痛烈に非難した。2章6節では、「主はこう言われる。イスラエルの三つの罪、四つの罪のゆえに、わたしは決して赦さない。彼らが正しい者を金で、貧しい者を靴一足の値で売ったからだ」と告発されている。ここでアモスは、貧しい者がわずかな借金のために支配者階級によって債務奴隷に転落させられていた実態を非難しているのである。また8章4節では、「このことを聞け。貧しい者を踏みつけ、苦しむ農民を押さえつける者たちよ」と告発されている。この「踏みつける」とか「押さえつける」という言葉は、支配者階級による残酷な農民搾取の表現である。また2

章8節では「祭壇のあるところではどこでも、その傍らに質にとった衣を広げ、科料として取り立てたぶどう酒を、神殿の中で飲んでいる」と言われているが、ここには支配者階級がイスラエルの古来の法を無視していた実態が告発されている。出エジプト記22章25節にあるイスラエルの古来の法では、貧しい者から質にとった衣は、日没までに返さなければならないことが規定されている。また、8章5-6節では、「お前たちは言う。新月祭はいつ終わるのか、穀物売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売り尽くしたいものだ。エファ升は小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取ろう。また、くず麦を売ろう」とある。秤をごまかすことは、イスラエルの古来の法において禁じられていたが、支配者階級たちはこれを無視し、不正な商売をしてぼろもうけをしていたのである。レビ記19章36節にある古来の法では、「正しい天秤、正しい重り、正しい升、正しい容器を用いなさい。わたしは、あなたたちをエジプトの国から導き出したあなたたちの神、主である」と厳粛に命じられている。また、5章12節では、「お前たちの咎がどれほど多いか、その罪がどれほど重いか、わたしは知っている。お前たちは正しい者に敵対し、賄賂を取り、町の門で貧しい者の訴えを退けている」と言われている。支配者階級がイスラエルの古来の法に違反して農民階級を虐げている実態に対して農民たちが裁判所（町の門）に訴えても、裁判官は支配者階級より賄賂を受け取っていたために、厳正な裁判を規定していた法を無視していたのである。出エジプト記23章8節の古来の法では、「あなたは賄賂を取ってはならない」と規定されている。また、5章21-23節には、「わたしはお前たちの祭りを憎み、退ける。祭りの献げ物の香りも喜ばない。たとえ、焼き尽くす献げ物をわたしにささげても、穀物の献げ物をささげても、わたしは受け入れず、肥えた動物の献げ物も顧みない。お前たちの騒がしい歌をわたしから遠ざけよ。豎琴の音もわたしは聞かない」とある。サムリアやベテルで行われていた当時の礼拝は、豪華な献げ物を献げ、騒がしい音楽の演奏されたもので、貧しい農民から不正な手段で得た利益で豪華な礼拝を捧げても主は喜ばない、とアモスは痛烈に批判した。紀元前8世紀のイスラエルは、政治の支配者も宗教の支配者も法廷の指導者も弱者を虐げて、貧しい者から搾取し、私腹を肥やしていた。そのような中で、経済的には貧富の差が拡大し、法的不正がはびこった。とりわけ、古い時代からの相続地を大切にしてきた農民階級が虐げられていった。アモス書の中にしばしば登場する「貧しい者」(2:6,4:1,5:12,8:4,6)、「弱い者」(2:7,4:1,5:11,5:4,6)、「悩む者」(2:7,8:4)という言葉は、ヤロブアムⅡ世の時代の支配者階級によって搾取された貧困層を表す社会学的用語である。また、3章9-10節には、「アシュドの城郭に向かって、エジプトの地にある城郭に向かって告げよ。サムリアの山に集まり、そこに起こっている狂乱と圧政を見よ。彼らは正しくふるまうことを知らないと、主は言われる。彼らは不法と乱暴を城郭に積み重ねている」とある。彼らは、「狂乱」、「圧政」、「不法」、「乱暴」という暴力的手段で自分たちの財産を拡大したとアモスは批判した。また、4章1節には、「この言葉を聞け。サムリアの山にいるバシヤンの雌牛どもよ。弱い者を圧迫し、貧しい者を虐げ

る女たちよ。『酒を持ってきなさい。一緒に飲もう』と、夫に向かって言う者らよ」とあるが、アモスはサマリアの上層階級が地方の農民から富を吸い上げ、贅沢な暮らしをしていた実態を非難した。また彼らは、「冬の家」と「夏の家」、また「象牙の家」(3:15) や「切石の家」(5:11) といった非常に贅沢な家を所有していた実態が非難されている¹¹。

弱者が虐げられている状況にあって、アモスは貧しい農民の立場に立ち、王国以前の時代からのイスラエルの古い法に則り、公正（ミシュパート）と正義（ツェダーカー）を主張した。アモスは、没落した農民を「正しい者」と呼ぶ¹²。これは、先祖からの相続地に住む正当な権利を持つイスラエル共同体の成員を指す。この成員は元来、自分の地所を所有し、結婚、祭儀、戦闘、裁判における4大権利を所有していた。アモスはこのような正当な権利を持つ自由農民が支配階級の横暴によって債務奴隷に転落させられている現実を告発したのである。アモス書5章24節に「公正（ミシュパート）を洪水のように、正義（ツェダーカー）を大河のように、尽きることなく流れさせよ」（私訳）とあるが¹³、これがアモスの中心的な主張である。この公正と正義は、王国以前の時代以来の契約に基づく神と人との、人と人との正しい関係を表し、多くの預言者はこれを主張した。ヘブライ語のシャローム（平和）の根本的な意味は、神と人との正しい関係、そして人と人との正しい関係を表したので、アモスはその関係を損なった当時の支配者階級が「平和」を踏みにじっているとして批判したのである。

② イザヤの格差社会批判

イザヤの活動した紀元前8世紀の後半は、南のユダ王国もウジヤ王（前787-736年）の繁栄した時代も終わり、アッシリア帝国がシリア・パレスチナに勢力を伸ばし、北のイスラエル王国が滅ぼされ（前722年）、南のユダ王国もたびたび攻撃を受けた危機の時代であった。イスラエル王国が滅ぼされた時、その上層階級が大量に北のイスラエル王国からイザヤの活動していた南のユダ王国に流れ込んできた。そして彼らは自分たちの資本を元手に農民から家や土地を取得したため、ユダの農民はますます貧しくなっていた。王国移行時期から始まっていた貧富の格差がイザヤの活動した混乱の時期にますます拡大していったのである。そのような状況の中で、イザヤは貧しくされていった農民階級を擁護し、虐げていた上層階級を告発したのである¹⁴。

1章23節には、「支配者らは無慈悲で、盗人の仲間となり、皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。孤児の権利は守られず、やもめの訴えは取り上げられない」とある。ここでは、エルサレムの「支配者」が不正な手段によって貧しい者から搾取していた現実が非難されている¹⁵。

「孤児」や「やもめ」は、弱い立場の代表であり、イスラエルの古い法では保護すべき人々とされていた¹⁶。エルサレムの支配者（=役人）は、本来「公正（ミシュパート）」と「正義（ツェダーカー）」をもって、弱い立場の者の権利を守るべきであったが、今やイスラエルの古い法

秩序は無視された、とイザヤは非難する¹⁷。また、5章8節には、「災いだ、家に家を連れ、畑に畑を加える者は。お前たちは余地を残さぬまでに、この地を独り占めにしている」とある。ここでイザヤは、アモス同様¹⁸、農民を虐げる富裕層に「災いだの叫び」を発する。この背後には、北のイスラエル王国がアッシリアの攻撃を受けたときに南のユダ王国に移住してきた富裕な支配者層によって古い時代以来の相続地を巧みに取り上げられ、農奴化していった農民の現実があるであろう¹⁹。さらにイザヤ書5章22-23節には、「災いだ、酒を飲むことにかけては勇者、強い酒を調合することにかけては、豪傑である者は。これらの者は賄賂を取って悪人を弁護し、正しい人の正しさを退ける」とある。ここでは、やはり「災いだの言葉」に導入されて、弱者を虐げる上層階級が非難されている。ここで非難されているのは役人である。彼らはカナニ化の影響を受け²⁰、無慈悲で盗人の仲間になり、みな賄賂を喜び、贈り物を強要していた。ここで「正しい人」と言われているのは、先祖からの相続地を受け継いできた農民である。彼らは、支配者階級によって相続地を巧みに取り上げられ、それを役人に訴えても、彼らは賄賂を取っていたので、その訴えを聞き入れてくれない実態をイザヤは非難しているのである²¹。また、9章9節には、「れんがが崩れるなら、切り石で家を築き、桑の木が倒されるなら、杉を代わりにしよう」とあるが、支配者階級は不正に取り立てた利益によって豪華な家を次々と建てていたというのである。また、10章1-2節には、「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を負わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する」とある。ここで言及されている人々は、富める者たちであり、「やもめ」や「みなしご」で代表される弱者を虐げて利益を得ていた人々である。また、29章21節には、「彼らは言葉をもって人を罪に定め、町の門で弁護する者を畏にかけ、正しい者を不当に押し退ける」とある。ここでは、上層階級の不正が非難されている。

アモス同様、イザヤも貧しい農民の立場に立ち王国以前の時代以来のヤハウエ主義²²の伝統に基づいて、公正と正義を主張した²³。そして、支配者層が弱者を虐げている現実を批判した。1章17節では、「善を行うことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの訴えを弁護せよ」と王国以前の時代の法に則って、弱者の保護を主張している。

③ ミカの格差社会批判

ミカは、イザヤとほぼ同じ時代に、すなわち紀元前8世紀の後半に活動した。ただ、イザヤはエルサレムの都会で活動したのに対し、ミカはユダの農村から搾取しているエルサレムの支配者層を非難した。2章1-2節には、「災いだ、寝床の上で悪をたくらみ、悪事を謀る者は。夜明けとともに、彼らはそれを行う。力をその手に持っているからだ。彼らは貪欲に畑を奪い、家々を取り上げる。住人から家を、人々から嗣業を強奪する」とある。ミカも、アモスやイザヤと同様に「災いだの言葉」の導入句でもってエルサレムの支配層を告発する。ミカは、ユダ

の地方に住み、エルサレムの支配層が地方の農民を農奴化し、大農園を経営し、イスラエルの古くからの土地法を無視していたことを非難したのである²⁴。また、3章3節には、「彼らはわが民の肉を食らい、皮をはぎ取り、骨を解体して、鍋の中身のように、釜の中の肉のように砕く」とある。ここでは比喩的な表現を用いて、エルサレムの支配層が地方の農民をいかに虐げていたかを厳しく告発している。さらに、6章11節には、「わたしは認めえようか。不正な天秤、偽りの重り石の袋を」とある。ミカもアモス同様²⁵、上層階級の商人が秤をごまかしてぼろもうけしていた現実を非難した。このようなことは、イスラエルの古い法では禁じられていた²⁶。

ミカも王国以前の時代以来の古い法（特に土地法）を主張し、それを無視して大土地所有を行っていた上層階級を非難した。そして、「公正」を主張した。彼は6章8節では「人よ、何が善であり、主が何をあなたに求めておられるかは、あなたに告げられている。公正を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである」と、神との正しい関係である「公正」を用いて、人間の最も大切な生き方を主張している。

3. 預言者の平和思想

古代イスラエルは、メソポタミアの大国（アッシリア帝国やバビロニア帝国）とエジプトの大国に挟まれた弱小の国であった。そこでしばしば大国の侵略に遭い、戦場にもなった。その時は、農民の農作物が略奪されるということもあった。そこで、農民たちは平和を切に願った。そこで、「今日は平和（シャローム）でありますように」という願いが、いつしか挨拶の言葉となった²⁷。平和のない現実のただ中で平和を真剣に問題にしたのは預言者たちであった。戦争の悲惨をさんざんめ尽くした古代イスラエルにおいて、預言者たちは人々が暴力を克服し、圧倒するシャロームの力を求めた。それは、暴力を暴力によって制して得られるシャロームではなく、暴力を拒むシャロームであった²⁸。

特に預言者イザヤは、平和を熱望した預言者であった。イザヤの時代は、戦争が絶えず、悲惨な現実を自ら体験した。そのような体験から平和への思いがとりわけ強かったのであろう。しかし、彼の「平和（シャローム）」は、神との正しい関係が根本である。イザヤ書48章18節に「わたしの戒めに耳を傾けるなら、あなたの平和は大河のように、恵みは海の波のように」とあるように、神の言葉に従うことによって、平和がもたらされるということであった。そこで彼は常に、神により頼むということを主張した。

イザヤ書7章1-17節は、「インマヌエル預言」と言われている。すなわち、インマヌエル²⁹という名の男の子が誕生するという預言である。これは、紀元前733年の「シリア・エフライム戦争」という戦争のただ中で預言されたものとされている。イザヤは南のユダ王国に属していたが、当時アッシリア帝国の脅威に対抗するために、北のイスラエル王国（エフライムと

も言う)とその北のシリア(アラムとも言う)とが同盟を結んだのである。そしてその同盟国は、南のユダ王国にもこれに加わるように求めたが、ユダ王国のアハズ王はこれを拒絶したのである。そこで、同盟国はユダ王国の首都エルサレムに攻めて来たのである。イザヤ書7章2節には「アラムがエフライムと同盟したという知らせは、ダビデの家に伝えられ、王の心も民の心も、森の木々が風に揺れ動くように動揺した」とある。このような窮地の中で、アハズ王はアッシリアに莫大な貢ぎを贈ることによって、軍事援助を要請しようとしたのである。それを知ったイザヤは、「落ち着いて、静かにしていなさい。(聖なる神に信頼するならば)恐れることはない」(イザヤ書7:4)と主張したのである。しかしアハズ王は、イザヤの勧告を聞かずにアッシリアに軍事援助を頼んだのである。そこで、アッシリアは北よりシリアとエフライム(北イスラエル王国)を攻撃し、そのためにユダ王国は窮地を免れた。しかしイザヤの危惧したように、ユダ王国はアッシリアの属国として重い朝貢を負わされ、その結果人々は重い税を課され、生活が困窮したので、シャロームとは言えない状態に陥ったのである。そのような中でイザヤは、王家にインマヌエルと呼ばれる子が生まれ、その子が王になった暁には理想的なシャロームの政治が行われることを夢見たのである。

イザヤは次に、イザヤ書8章23節-9章6節において「平和の君」の誕生の預言をした。この預言は、先ほどのシリア・エフライム戦争の時、イスラエル王国の北部がアッシリアの軍隊によって蹂躪された出来事(前733年)が背景にある。アッシリア帝国は軍事大国であり、その軍隊は古代オリエントにおいても特に残虐な軍隊として知られていた。イザヤ書8章21-23節に「この地で、彼らは苦しみ、飢えてさまよう。民は飢えて憤り、顔を天に向けて王と神を呪う。地を見渡せば、見よ、苦難と闇、暗黒と苦悩、暗闇と追放。今、苦悩の中にある人々には逃れるすべがない」とあるが、これはアッシリアの軍隊によってイスラエル王国の北部が蹂躪された時の描写である。ここに「民は、顔を天に向けて王と神を呪う」とある。王というのは、イスラエルに侵略をした当時のアッシリアの王ティグラト・ピレセルのことであり、この王によってイスラエルの民は残虐な扱いを受けたので「呪う」というのは分かるが、旧約聖書において「神を呪う」というのは、冒瀆であり、普通はあり得ない。しかし、それほどまでに苦しみに遭わされたということであろう。このような悲劇を見て、イザヤは心から平和を願った。非常に厳しい現実直面してイザヤは、将来の希望を夢見たのである。

9章1節で「闇の中を歩む民」とか「死の陰の地に住む者」と言われているのは、アッシリアの侵略に遭って苦境に立たされていた当時のイスラエルの人々の苦しい状況を表している。しかしイザヤは、その苦しみの状況の中で、光が与えられる、と述べる。これは、希望を表す。さらに、9章4節では「地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく、火に投げ込まれ、焼き尽くされた」と言われている。これは、戦争の装備が廃棄されることを言っている。ここでは、武器の放棄という理想が夢見られている。そして、5節ではそういう平和を実現してくれる「平和の君」の誕生が預言されている。次のように言われている。「ひとりの

みどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる。」ここの「ひとりのみどりご」が誰かについては、いろいろな説がある。キリスト教では、これはイエスの誕生の預言だと解釈された³⁰。しかし、このイザヤの預言のコンテクストでは、当時のダビデ家の者が意図されている。それは6節の「ダビデの王座」という言葉から明らかである。イザヤは、実際のイスラエルのダビデ王家に偉大な王が生まれ、平和（シャーローム）を実現してくれると期待した。

しかし、この王は、アッシリア帝国の王のように、自分の権力や、軍事力で他の国々を押さえつけて戦争のない状態と作り出すというのではなく³¹、逆に軍事力を放棄することによって平和をもたらすというのである。それではどのようにしてであろうか。6節には「公正（ミシュパート）と正義（ツェダーカー）によって」とある³²。ヘブライ語のシャーロームは、単に戦いのない状態を言うのではなく、神との正しい関係における真に望ましい状態を意味する。その神との正しい関係を、預言者たちは公正（ミシュパート）と正義（ツェダーカー）で言い表した。ここでイザヤは、今生まれる「平和の君」は、「公正と正義」によって政治を行う、と言われている。当時の為政者によくあった抑圧や暴虐でなく、弱い立場の者の権利を守ることであり得る。イザヤは1章23節で、「支配者らは無慈悲で、盗人の仲間となり、皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。孤児の権利は守られず、やもめの訴えは取り上げられない」と弱者を虐げる当時の為政者を非難している。イザヤの預言した「平和の君」は、キリスト教ではイエスの誕生の預言と解釈されたが、イエスは特に貧しい者や弱い立場の者を愛し、その権利を守られた。マタイによる福音書25章40節でイエスは、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と言われた。

次にイザヤは、為政者が軍事力に頼ろうとしたときにこれに強く反対した。一つは、前述のシリア・エフライム戦争の時、アハズ王がアッシリアの軍事援助を受けようとしたときである。それを知ったイザヤは、「落ち着いて、静かにしていなさい。（聖なる神に信頼するならば）恐れることはない」（イザヤ書7:4）と主張したのである。もう一つは、アッシリア帝国のサルゴン王が死んだ（前705年）のをきっかけに、各地に反アッシリア運動が起こり、ユダの王ヒゼキヤもこれに加わると共に、エジプトの軍事力に頼ろうとした。しかしイザヤは、聖なる神に頼り、エジプトの軍事力に頼ってはならない、と反対した。30章15節には、次のようにある。「まことに、イスラエルの聖なる方、わが主なる神は、こう言われた。『お前たちは、立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある』と。しかし、お前たちはそれを望まなかった。」またイザヤは31章1-3節で次のようにも言った。「災いだ、助けを求めてエジプトに下り、馬を支えとする者は。彼らは戦車の数が多く、騎兵の数がおびただしいことを頼りとし、イスラエルの聖なる方を仰がず、主を尋ね求めようと

しない。しかし、主は知恵に富む方。災いをもたらし、御言葉を無に帰されることはない。立って、災いをもたらす者の家、悪を行う者に味方する者を攻められる。エジプト人は人であって、神ではない。その馬は肉なるものにすぎず、霊ではない。主が御手を伸ばされると、助けを与える者はつまずき、助けを受けている者は倒れ、皆共に滅びる。」イザヤの主張する平和は、ただ「聖なる神」に頼ることであって、軍事力に頼るのは空しいと言う。

またイザヤは、「終末の平和」という預言をしている。イザヤ書 2 章 2-4 節には次のようにある。「終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞって大河のようにそこに向かい多くの民が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう』と。主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」また、イザヤとほぼ同じ時代に活躍した預言者ミカも 4 章 1-3 節で次のようにほとんど同じ預言をしている。「終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。もろもろの民は大河のようにそこに向かい、多くの国々が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう』と。主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」

パレスチナは、二つの文明圏（エジプト、メソポタミア）を結ぶ通路の国である。そこでよく大国間の戦争に巻き込まれた。そしてしばしばそこを通る軍隊にイスラエルの農民は食料を略奪された。貧しい農民にとっての願いは、「平和（シャーローム）であるように」ということであった。イザヤもミカも、終わりの日には、それが実現する、と預言した。イザヤ書 2 章 4 節およびミカ書 4 章 3 節には、「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」とある。この言葉は、ニューヨークの国連本部の建物の壁に記されている。あの第二次世界大戦の悲劇を経験した国々が再び戦争をしないと願ったときに、最もふさわしい言葉だとしてこのイザヤの預言を記したのであろう。この戦争の道具を平和の道具に変えることは、イスラエルの貧しい農民が切に望んだことである。これはまた、日本国憲法の第 9 条の戦争放棄、軍隊の不保持と通じるものがある。

またイザヤは 11 章 1-10 節において、「自然界の平和」の預言もしている。ここで、エッサイの株から出るメシアが正当な裁きをすれば、自然界にも平和が与えられる、と言われている。11 章 6 節には、「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く」とある。草食動物が肉食動物と平和的に共存するというこの預言は、いささか非現実的でユートピア的であるが、イザヤは聖なる神に心から信頼すれば、本当に自

然界にも争いのない平和が実現すると信じた。預言者ホセアもこれと似た預言をしている。ホセア書2章20-21節には、次のようにある。「その日には、わたしは彼らのために、野の獣、空の鳥、土を這うものと契約を結ぶ。弓も剣も戦いもこの地から絶ち、彼らを安らかに憩わせる。わたしは、あなたととしえの契りを結ぶ。わたしは、あなたと契りを結び、正義と公平を与え、慈しみ憐れむ。」

預言者たちの待望したメシアは、神との正しい関係をもち、「公正」と「正義」をもって、平和を実現する指導者である。そのメシアの到来を預言者ゼカリヤは、9章9-10節で次のように言っている。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子であるろばに乗って。わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ。」新約聖書においては、イエスが最後にエルサレムに入城したとき、戦いの乗り物である白馬にではなく、平和の家畜であるろばに乗って入った、とされている³³。

4. 結び

旧約聖書で「平和」を意味するシャロームは、単に戦争のない状態ではなく、神との正しい関係にある真に望ましい状態を意味する語である。その観点から、旧約聖書の預言者たちは、抑圧や暴虐、差別や格差社会の現実を非難し³⁴、神との正しい関係を意味する「公正」と「正義」を主張したが、これが彼らにとっての「平和」の思想である。

参考文献

E.M.Good, Peace in the Old Testament, in *The interpreter's Dictionary of the Bible*, New York: Abingdon Press, 1962, p.704~706

野本真也「平和」、『新聖書大辞典』キリスト新聞社、1971年、1199~1200ページ

『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1989年

ピーター・C・クレイギ『聖書と戦争 ー旧約聖書における戦争の問題』村田充八訳、すぐ書房、1990年

村田充八『戦争と聖書的平和 ー現代社会とキリスト教倫理ー』聖恵授産所出版部、1996年

ヨハン・ガルトゥング『構造的暴力と平和』高柳・塩谷・酒井訳、中央大学出版部、1991年

橘木俊詔『格差社会 ー何が問題なのか』岩波新書、2006年

水野隆一「ヘブライ語聖書は『平和』について何を語るか」、関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『平和創造への道』新教出版社、2010年、71~100ページ

樋口 進『古代イスラエル預言者の特質 ー伝承史的・社会史的研究』新教出版社、2013年
石川 立「旧約聖書における暴力と平和 ー旧約聖書は戦争をどう物語っているかー」『福音と世界』2016年3月号、6～12ページ
橋本健二『新・日本の階級社会』講談社現代新書、2018年

<注>

- 1 ヨハン・ガルトゥング『構造的暴力と平和』高柳・塩谷・酒井訳、中央大学出版部、1991年。
- 2 橋本俊詔『格差社会 ー何が問題なのか』岩波新書、2006年、7ページ。
- 3 橋本健二『新・日本の階級社会』講談社現代新書、2018年、11ページ。
- 4 野本真也「平和」、『新聖書大辞典』キリスト新聞社、1971年、1199ページ。
- 5 E.M.Good, Peace in the Old Testament, in *The interpreter's Dictionary of the Bible*, New York: Abingdon Press, 1962, p.705.
- 6 聖書の引用はすべて、『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1989年による。
- 7 樋口進『古代イスラエル預言者の特質 ー伝承史的・社会史的研究』新教出版社、2013年、76ページ参照。
- 8 列王記上8章65節参照。
- 9 アモス書6章14節参照。
- 10 樋口、前掲書77ページ参照。
- 11 同80ページ参照。
- 12 ヘブライ語でツァッディーク、アモス書2章6節参照。
- 13 新共同訳では、「正義（ミシュパート）を洪水のように、恵みの業（ツェダーカー）を大河のように」と訳されているが、私訳のようにミシュパートは「公正」とツェダーカーは「正義」と訳するのが適切であろう。
- 14 樋口、前掲書81ページ参照。
- 15 イザヤ書3章14-15節も参照。
- 16 出エジプト記22章21節、申命記24章17節参照。
- 17 イザヤ書1章21節参照。
- 18 アモス書5章18節、6章1節参照。
- 19 樋口、前掲書82ページ参照。
- 20 イスラエル民族がカナン（パレスチナ）に移住する以前に住んでいた先住民がカナン人で、彼らは都市国家を形成していた。ダビデがイスラエル王国を建国したときに（前約1000年）、カナン人の都市国家を模範にして政治体制を作ったが、それは王を頂点とする階級社会であり、すべての民が神の前に平等であるというイスラエルの古来のあり方とはかなり違ったものであった。
- 21 イザヤ書10章1-2節も参照。
- 22 ヤハウェという神を唯一の神として崇拜する立場。階級社会のカナン主義とは対立した。
- 23 イザヤ書5章7、16節、9章6節、16章5節、28章17節、32章1、16節、33章5節参照。
- 24 樋口、前掲書84ページ参照。
- 25 アモス書8章5節参照。
- 26 レビ記19章36節参照。
- 27 今日でも「こんにちは」「さようなら」「ごきげんよう」などの挨拶の言葉はヘブライ語ではシャロームである。
- 28 石川立「旧約聖書における暴力と平和 ー旧約聖書は戦争をどう物語っているかー」『福音と世界』2016年3月号、11ページ参照。
- 29 ヘブライ語で「神、我らと共にいます」という意味。
- 30 ルカによる福音書2章11節参照。
- 31 当時は「アッシリアの平和」と言われたが、それはアッシリアの圧倒的な軍事力によって諸国が押さえつけられ、表面的に戦争のない状態が保たれていたからである。
- 32 新共同訳では、「正義（ミシュパート）と恵みの業（ツェダーカー）によって」と訳されているが、ミシュパートは「公正」とツェダーカーは「正義」と訳するのが適切であろう。

³³ マタイによる福音書 21 章 7 節、マルコによる福音書 11 章 7 節、ルカによる福音書 19 章 35 節、ヨハネによる福音書 12 章 15 節参照。

³⁴ これは、ガルトゥングの主張した「積極的平和」に通じる。